

◆ 第一話

はな ふさ ひめ
花 房 姫

(昭和29年5月20日掲載)



昔々、筑紫平野でも非常に尊いお方とされていた父の命（ちちのみこと）が、或る朝早く起きて見ますと、彦山権現の方から、いとも尊い御光が射して来ました。何かいわれがあるにちがいないと父の命は直々に家来を仕わして彦山権現の御告げを聞くことにしました。

権現様は「私のところにしかるべき座主をつかわして、おごそかに祭るように」と云いました。命には男の子がなかったので、建立宮守（こんりゅうみやもり）の花房尊（はなふさのみこと）を座主と

してつかわし、可愛い命の姫を花嫁として、出発することにしました。

花房の尊と花房姫とは、それぞれ馬に乗って、はるばる筑紫の平野から、父の命、母君それから大勢の家来に見送られて、はるかに遠い彦山まで来ることになりました。

その時の姫は、父の命、母君と別れて初めて旅をするのですからどんなに、さびしかったことでしょうか。やさしい尊にはげまされて、野をこえ山をこえて、一千尺もある高い高い彦山の山の中へやって来たのです。

里の人々は遠い筑紫の都から、霊現あらたかな彦山権現の天台座主として尊と姫をあがめたてまつりました。尊は、権現様に仕えて、御説教をしたり、御祭をしたりしました。姫はなにくれとなく尊の世話をしました。楽しい毎日が続きました。

ところが、五、六年たつうちに、尊は御祭の酒を飲みすぎて、酔って帰って来たり、どうかすると二日も三日も、どこかえとまって、帰って来ないこともあるし、たまたま帰って来ても姫をいじめるようになりました。

姫は辛抱しましたが、とうとう我慢が出来なくなり、或る晩、尊にお酒を飲みすぎないように、身体に気をつけるようにと手紙を書いて、こっそりと彦山の山をおりて行きました。そして豊前の国、守実の里のある郷土の家をたずねて行ったということで在ります。

その主人は大の権現崇拝者でしたから、姫の来たことを大変よろこび、どうかして、現元さまの別院建てたいと思い、幸い彦山によく似た山がありましたので、その山に御殿を建てることになりました。

姫は気が進みませんでした。仕方なく、そこの権現座主になることになりました。里の人々はどんなに悦んだ事でしょう。姫は女ながらも、一生懸命に教え導きましたので、山を超え、谷を下って、ぞくぞくと御参りがありましたが、尊の事を思うと時折悲しくなりました。一方尊も、姫の手紙を読んで、心を入れ替え、修行に励みました。風の便りに耶馬溪に在ることを知り、帰ってくるように、家来をつかわしましたが、姫はとうとう帰りませんでした。

姫は、尊が立派な生活をしている事を聞いて、帰りたいたと思いましたが、自分を頼ってくれる村人の心の素朴なに打たれて、どうしても守実の里を離れる事が出来ませんでした。そうするうちに、ふとした風邪がもとで、病気が段々に重くなりました。そして、とうとうたくさんな村人に見送られ乍ら死んで行きました。最後に今までの御礼を云い、そして私のかばねを彦山権現の見える場所に埋めて下さい。墓のそばに松を植えて、この着物を掛けて下さい。と云ったということです。（その墓は、現在守実の西端の小高い丘の上にある烏帽子形の自然石だといわれている）（完）



花房姫の墓（右）



花房姫の墓から英彦山を望む